

# 明治大学文学部地理学教室の歩み

——文科専門部史学科・地理歴史科時代——

岡山 俊 雄

はしがき

明治大学の現在の文学部は、昭和七年に開設の文科専門部の成長したものである。この文科専門部は、明治三十六年に新設され、卒業生を一回出しただけで廃止された文学部が、約二十五年をへだてて、復活したものである。明治三十六年は、明治法律学校が大学組織となり、明治大学と改称された年である。その十二月に、法学部・政治学部のほか新たに商学部・文学部が設けられ、翌三十七年に学生を募集した。この時の文学部が明治四十二年に第一回の卒業生を送り出すまでの経緯と、その教授陣、学科目、明治大学文学研究会、明治文学会などについては、藤沢衛彦（敬称略、以下同じ）の「文科・文学部五十年の思い出」（駿台史学、第七号）「文学部創設二十五週年記念号、昭和三十一年」に詳しい。

昭和七年に改めて発足した文科は、法・商・経・女子部とならぶ明治大学専門部の一科で、文芸科と史学科（ほかに一年制の新聞高等研究科）に分かれ、前者は昼、後者は夜である。文科部長尾佐竹猛、文芸科長山本有三、史学科長渡辺世祐、幹事は文芸科は吉田甲子太郎、史学科は松崎実という、主脳部の顔ぶれであった。この史学科の誕生から昭和十五年頃までのことについては、当時の助手神尾庄治の「史学科時代」、それに続く戦中、戦後の時期については、二代目の助手だった宗京燦三の「地理歴史科時代」と題する回想記（ともに駿台史学第七号所載）がある。以下、この両者をそれぞれ神尾手記・宗京手記と略記する。

文科専門部史学科には九時間分の地理関係の講義が設けられていた。昭和十三年、史学科は地理歴史科となり、地理の講義は飛躍的に増え、十六年三月の卒業生から中等学校の歴史と地理の両方の教員免状が与えられるようになる。昭和二十年度からは、制度が変わって、三年間の在学で歴史または地理のいずれかの免状が与えられ、両方の免状の取得を望むものは、さらに一年在学しなければならぬことになる。昭和二十四年、専門部文科は新制大学の文学部と改まり、地理は史学地理学科の一専攻となる。ただし専門部は文学部と併存の形で、

昭和二十五年末まで存続する。なお、三十二年三月には大学院文学研究科に修士課程地理学専攻が開設され、三十九年三月には博士課程地理学専攻が増設された。これが明治大学文学部の「地理」の履跡の概略である。

## 史学科時代

昭和七年創設の史学科で地理学を講じたのは、辻村太郎と佐々木彦一郎である。辻村は、いうまでもなく、当時の東京帝国大学理学部地理学教室の主宰者で、大正十二年刊行の「地形学」によって日本の地理学界に一時期を画し、史学科へ出講するようになった頃は、第二弾にあたる大著「新考地形学」上巻の校正中、おそらく下巻の執筆中と推測される。その出馬は、史学科長渡辺世祐の懇請による。佐々木彦一郎は新進の人文地理学者で、本務は東大地理学教室の助手であるが、かたわら第一高等学校の教壇に立っていた。ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシユの紹介者としては第一の先覚者である。史学科の学生が一年から三年まで揃う昭和九年に岡山俊雄がこの二人に加わった。岡山は大学卒業後四年目、大学院に籍をおいていた。

当時の地理関係の学科目と担当者は第一表の通りである。この学科目はその名称から、史学科のお膳立をした人の案そのままと見受けられる。一年生からの初年度に

学 科 目	配 当		担 当 者
	学年	時数 毎週	
西洋地理	3	1	岡 山
東洋地理	3	1	佐々木
日本地理	2	1	佐々木
人文地理学	2	2	佐々木
地図読法作法	1	2	岡 山
地理学通論	1	2	辻 村

第1表 昭和9年度の地理学関係科目と担当者。この科目は12年度末まで。

は、通論は辻村（これは十一年度まで変化なし）、地図読法作法（これは時間割の上などでは読図作図と略称）と人文地理学を佐々木、二年目に日本地理が開講されて佐々木が担当、三年目に第一表のようになった。

佐々木彦一郎は昭和十一年四月十日に病気のため世を去った。学生はかれらの発行する明治大学史学会ニュース第三巻第六号の全頁（六頁）をその追悼にあてた。佐々木の担当していた三科目中、人文地理学は補充として就任した山口貞夫、残る日本地理、東洋地理は岡山が分担することになった。山口は、ブラーシユの人文地理学原論の本邦最初の完訳者で、その訳書は昭和八年に出版されている。十一年度末には辻村が辞職した。その結果十二年度には、人文地理学と日本地理は山口、その他は全部岡山という分担になった。

この頃、ひと晩は五・一〇〜五・五五、五・五五〜六・

四〇、六・四五〇七・三〇、七・三〇〇八・一五、八・二〇〇九・〇五、九・〇五〇九・五〇と六時限に区切られていた。ただし、一時間単位（正味四五分）の授業は数も少かったし、十三年以降は専門科目では皆無となった。

第一表の学科目のほかに「地理作業年三回」という定めがあった。今の地理実習である。三浦半島・箱根熱海・榛名山・長瀬・修善寺・日光中禅寺・江の島・諏訪塩尻峠・上野原・鋸山・大島などに出かけている。やや趣の変った実習としては、銀座新宿浅草の商店街調査（佐々木）、歩測と磁石による駿河台一部の測図（岡山）、帝劇で映画「新しき土」を見る（山口・岡山）などが挙げられる。宗京手記は実習の模様を次のように伝えてい

「ある夏の初め（昭和八年六月十一日、岡山註）、辻村先生指導のもとに、遊覧バスを利用する箱根近傍への地理実習旅行が実施された。ふだん怠け者で実習なんかは敬遠していた学生連中も今日は自動車旅行だとばかり、鼻唄まぢりバスに乗込み、酒匂川鉄橋付近で一しきり先生の实地指導を受けたまではよかったが、湯本からいよいよ山の登りへかかるといふ所で突然全員下車を命ぜられた。そこで先生から、今日の実習の中心は箱根火山の状況を实地に見ることである。全員これから旧東

の免状がもらえるようになって、受験生は四、五〇名に過ぎなかった。昭和十二年度になっても、学生数は一年十五、二年十八、三年十六であった。神尾手記を引用する。「史学科ではいけない。地理歴史科でなくてはならぬとの輿論が生徒の中から高まって来た。これは歴史家養成という史学科創立の大精神に反する。しかし経済には勝てぬ。止むなく地理歴史科と改称することになった。昭和十三年のことである」。

地理歴史科時代

「本来歴史ト地理トハ相関連シテ相互ノ知識ノ完全ヲ得ルモノナリ。従来史学科ノ学科課程ハ歴史ノ教課目ノ配列ニ於テハ充分ナリシモ地理ノ教課目ハ頗ル貧弱ナリ。今般其ノ学科課程ヲ改正シ、地理ノ教課目ヲ充実シ、従ツテ史学科ノ名称ヲモ地理歴史科ト改ム」。これは学則改正の申請書に記された「史学科ヲ地理歴史科ニ改ムル理由」である。そして、増設される地理の教課目次の如しと、二十一時間分の学科目を挙げ、既設のものに加えて地理関係の科目は三年間に計三十時間（現在の算え方ではほぼ六〇単位）となり、同時に地理学通論は地理学概論、地図読法作法は図学実習、東洋地理（一）西洋地理（一）は併せて外国地誌（一）、地理作業は実習見学と名称を改めた（第二表参照）。

海道を箱根町まで歩いて登る、というお達し。折角のバスはカラでサッサと新道をいってしまい、我々一行は汗ビッシュヨリで四里の山道をよぢ登らされてしまった。先生自身先頭に立って指導されるので文句をいう筋は全然無いのであるが、云々。また、昭和十年あるいは十二年の実習で、箱根峠から十石峠へ向う途中、切れぎれに飛ぶ霧を見て「この煙何ですか」と質問した学生がいた。この質問は岡山に実習の意義を改めて認識させ、ひいては講義のしかたについても反省させた。早く故人となったその学生の細おもてな顔と、そういう質問をしてくれたことを、筆者は今なお忘れない。

神尾手記には「家族的親和と実習とを史学科の特色とする」、また「毎学期史学科懇親会を料亭で開いた」とある。毎学期という記憶は筆者にはない。だが、この懇親会は教師だけのものではなく、学生と教師の懇親会である。毎年、一月の下旬に史学科大懇親会すなわち新卒業生送別会を開いたことは確かだ、三月に繰返してもう一度やった年もある。まだのびやかな時代であった。だが問題がなかったわけではない。学生が少いことである。史学科が設けられて満一年後、二年に進んだものは十六名、入学式へ出て来た新入生は約三〇名、昭和九年の冬に文部省の検定試験に合格し、無試験で中等教員の歴史

科 目	地理演習															
	1	1	2	3	1	2	3	1	2	3	2	2	3	3	1	3
自然地理学概論	岡山	岡山	吉村	吉村	井上	佐藤	佐藤	井上	井上	井上	岡山	渡辺	多田	渡辺	多田	多田
	岡山	岡山	吉村	渡辺*	井上	小川	佐藤	井上	井上	井上	岡山	小川	多田	渡辺*	多田	多田

第2表 地理歴史科における地理関係科目。各科目とも毎週2時間。担当者は昭和15, 16年度を示す。昭和13, 14年度には一部の科目は未開講。地理演習は16年度から新たに開設、\*印は16年度から1学年に担当の科目となる。

この地理の時間の増加に見合う教師の増員の行われたのは昭和十三年と岡山は思い込んでいた。しかし、地理歴史科となったために増加する地理の講義時間は、初年度には僅かに三時間で、山口・岡山両人の持時間の僅かな増加でまかなえたのである。従って、地理歴史科への組織がえに要する増員人事は、十四年四月に佐藤弘・多

田文明・吉村信吉、十五年四月に渡辺光と二段に分けて行われた。ただ、思いがけないことに、昭和十三年度の授業を担う片腕の山口貞夫の健康悪化のため、五月から六月へかけてのひと月間、筆者がその代講をする（当時はそれがならわしだった）という事態が起った。七月下旬には、山口夫人から明年三月まで静養という申し出があった。事実、彼は再び教壇へ立つことはなかった。八月上旬、陸軍予科士官学校教授井上修次に代講を依頼することに決った。この人事は、九月になって、代講制は認めないという専務理事から待ったがかかったが、結局、この井上が地理歴史科の土台作りに一肌もふた肌も脱ぐことになったのは幸せであった。

右のように、地理歴史科になったとはいふものの、初年度には地理の陣営は山口（井上）と岡山のただ二人、十四年度に佐藤・多田・吉村の応援を得てとみに内容、態裁ともに整い、十五年度の渡辺光の参画によって充実した陣容となった。明治の地理は、多田文明・渡辺光の両氏から、この時以来今日まで三十五年の永きにわたって、引続き渝らぬ協力を得ている。往時を知る者には感慨を催させる事実である。ついでながらここに深甚の謝意を表したい。

昭和十五年現在の佐藤・多田・渡辺・吉村・井上・岡

志による明治大学地理研究会が発足した。明治大学報國団の結成された昭和十五年の九月二十五日（これは文部省の試験の三ヶ月前）には、研究発表会をおこなうという余裕を見せている。ほとんど何もなかった地理関係の設備の整備には、十四年の夏からとりかかった。地形模型・岩石標本・器械器具類・掛地図・地形図類の購入、洋書・図書・雑誌の目録作成等々。この時図面をひいて本郷元町の家具屋で作らせた本箱と地図棚は四号館でまだ余命を保っている。それらのものを納める所として、多分、本館の図書館事務室の入口付近から階段を登った、迷路に近い廊下に面した一室が与えられた。はじめできた地理学研究室というべきものだったのかもしれない。今その位置をつきとめ得ないが、終戦後まで同じ場所にあったことはたしかである。

十五年二月二十一日に早手廻しに受験についての心構えを伝えて万全を期した（つもりの）文部省の認定試験は、十二月二十日午後六時から九時までおこなわれた。問題の一つに「Ptolemy に『つて述べよ』」というのがあった。地理学史は地理学概論で、相当くわしくやっていた。講義は、Dickinson, R. E. and Howarth, O. J. R., *The Making of Geography, 1933.* —— 図書館にたのんで買ってもらった最初の本——の内容を、Emm.

山の年齢は、それぞれ四三・四〇・三六・三四・三一・三七であった。前々からの知り合いではあるし、心を合わせることに苦勞はなかった。宗京手記は次のように述べている。「たまたま私が研究室へ入った年は、地歴科の第一回生が三年になり、地理教員の無試験検定資格を得るため文部省の認定試験が行われる時に当たっていた。

これに備えて学生諸君の勉強は猛烈を極め、地理関係科目担当の諸先生も、毎夜十時に普通の授業が終ったのち、更に一時間、二時間に及び特別授業をされるといった有様で、実は史学科第一回生として卒業した私も、在学中同じ様に歴史についての文部省の試験を受けた経験があったが、生来怠け者だったせいで、その時も特別これといった勉強をした覚えがなかったので、この猛烈な学生諸君の勉強ぶりには少からず驚かされた。指導の先生方が非常に熱心にやって下さったので学生諸君もそれにつられて努力しような傾きもあったが、結果は勿論優秀な成績で無試験検定は認可されることになった。

実際、学生の方もよくやったのである。地理歴史科一年目の九月には、続いて翌十四年の四月には、学生に召集令状が下り、壮行会を開き、一、二日のちに東京駅へ、上野駅へ見送るといふ出来事が、すでに始っていた。一方、十四年七月一日には主として学生の自発的意

de Martonne の三巻本 *Traité de Géographie Physique* 第一巻の冒頭の一節「地理学の発達」——後に飯塚浩二の全訳が出た——の記述の仕方に従ってならば換えたもので、最新とはいえなくても、カビ臭いものでは決してなかった。ただ、若気の至りで、*Ptolemaios* とのみ教え、英語では *Ptolemy* というという但し書きをつけ加えなかった。試験後学生は、*Ptolemy* が *Ptolemaios* だとわかっていたらいくらでも書けたのにと、口惜しがった。今さら自分に腹を立てても追いつかない、自嘲してはどうにもならない、しまった、申しわけないという思いで私は黙りこんだ。明けて昭和十六年二月二十七日、検定委員内田寛一の施設等に対する視察——前記の速成の研究？室もその対象の一つ——が行われた。そして地理歴史科の卒業生は、特に成績がわるくない限り、無試験で中等学校地理・歴史二科目の教員資格を得られるようになったのである。

十六年度からカリキュラムが少し変わった。三年の自然地理二時間と、同じく三年の外国地誌四時間のうち二時間を一年へまわす、三年に地理演習二時間を新設する。この二時間は三年の国史演習の時間を削って地理へまわしたものである。われわれが要求したわけでもないのに、こういうことになったのは、あるいは当時なお認め

られた歴史関係の授業時間数と地理関係のそれとのアンバランスに目をとめた文部省が、無試験検定資格認可にあたって付け加えた指示ないし要望に応えるための措置だったのかもしれない。そして新たに、陸軍予科士官学校教授小川徹が講師として迎えられ、授業の担当は第二表の下端に示すようになった。地理歴史科の地理の歴史において、この頃が内容的にもっともよく安定し整っていたのではなからうかという気がする。

この昭和十六年に、全国高等専門学校在学修業期間の六ヶ月短縮が決定され、翌十七年には三月と九月に二回、卒業生を送り出した。同年六月二十二日、山口貞夫はついに帰らぬ人となった。なお十七年には珍しく二回、地理研究会が行われている。

六月二十二日

七月三十一日

水と生活

三年 簡浦 明

天竜川河口掛塚町の地誌

秦野盆地の煙草

三年 沼野哲司

砂町の工場分布に就いて

国民科地理の行く道

二年 木戸田博

三年 渡辺 操

羽根木町の発展

三年 八巻要三郎

北海道の薄荷に就いて

根室原野の開拓

三年 渡辺 操

三年 渡辺 操

発表後、井上修次の講評

発表後、岡山・井上の講評

当時は卒業論文は課せられていなかったから、このよ

うな調査研究は学生の自発的活動によるものであった。一回生の検定試験に対する努力を直接に間接に見たり聞いたりして、そのお蔭で、もはやそのような苦勞をしなくてよくなったのだから、自分たちも一つ何かしなければと、おおむねそういう気持ちでいたところへ、井上修次からぜひやるようにと激励され気合をかけられた、というような事情も、その背後にはあったのである。

ここで、地理歴史科そのものに関することがらではないが、序にふれておきたいことがある。われわれが教鞭をとるようになって感じたことの第一は、教科書ないし参考書として、手頃なあるいは適当な書物が無いという不便である。「自然地理学」上・下二巻（地人書館、昭和十五年四月・七月）は、共著者七名中五人までが明治の地理歴史科の教師であることからもうかがえるように、各人が期せずして同じようなことを痛感したところから生れたものなのである。もう一つは、昭和十六年秋から相談して、われわれは日本地誌学会なるものを作った。表向きの趣旨は、地誌——地域の研究の重要性を説いてその振興をはかることにあつたが、具体的手段として、少くない地方研究家ないし各地に散在する地理愛好家——かれらは地理歴史科のポテンシャルな学生である——は、今まで互に連絡する途もなく、調査研究につい

て語り合う手だてもなかった、それらの人々を横断的に結合し、互に手をとって行こうではないか、と呼びかけた。そして単行本形式の「日本地誌学Ⅰ」を、十七年十一月に刊行した。それにはわれわれの寄稿のほか、あらかじめ懸賞募集しておいた論文（応募数八十三篇）を選考して掲載した。掲載された応募論文の執筆者の多くは、明治大学地理歴史科の卒業生か学生でなければ、法政大学高等師範部地理科の卒業生か学生であった。要するに日本地誌学会は、かれらに発表の場所を提供しようということを、当面の一つの目的としていたのである。この仕事にもっとも熱心だったのは井上修次であるが、印刷事情の急速な悪化と、次いで敗戦が、そのような意図までも霧散させてしまった。

その井上修次は十八年二月下旬南方へ出発した。同年四月二十八日には地理歴史科の新入生歓迎会が開かれ、九月二十二日には新卒業生送別会が催されている。世の中はまだ平穏と受けとれるかもしれないが、十月二十日には明治大学出征同窓壮行会が開かれた。委細は記憶にないが、地歴科といわずに明治大学といっているのが注意を惹く。学校当局は十九年度の文科の学生募集を停止した。二十年度には必ず文科の学生を募集するという条件で、この措置をのむことになる。また文部省は十九

年に、教員資格を得るために必要な受講科目を、二十年度入学の学生から大幅に増やすことにした。夜間三年の地理歴史科では、卒業と同時に、今までのように地理・歴史の二科目の教員免許を取得することは、とうてい不可能ということになったのである。そこで七月一日、学士会館で教授会を開き、二十年度からの入学生を地理専攻と歴史専攻に分ける。三年後の卒業の際にはそれぞれ専攻科目の教員免許を受ける、希望者は更にもう一年在学し前後四年かけて両科目の免許が得られるように学科課程を改訂する、ということになった。すでに六月中旬から警戒警報が頻発されていた。宗京手記には、午後五時からにはじまったこの会議の様を「少し離れた席におられる先生はどなたなのか顔も分らないといったようなうす暗い燈火管制下の会場で、全く前途暗鬱たる思いで云々」と記してある。

昭和十九年度は、学生募集停止のため一年生のいない新学期が四月上旬からはじまった。六月には前記のように警戒警報がしばしば出て、そのための休講が多くなり、燈火管制が平常化して来る。九月にも学校は普通に授業を開始した。だがメモによると、十一日一日から大晦日まで少なくとも五十回、空襲警報または警戒警報が発令され、五十機来襲・来襲七十機ということもあつ

た。もしそれが夜間なら、電燈のスイッチは電源で切られ、何回となくそのたびに、教室から暗黒の階段を手さぐり足さぐりで下りた。その記憶は今なお新しい。しかし、空襲による火災がなかっただけ、この期間はまだよかつた。

昭和二十年正月も十日過ぎから授業開始、筆者は二月十六日まで講義を続けている。三月十日大空襲、江東地区の大火災は小雨の空に反映して、飯田橋に近いアパートの屋上でも、新聞が読めるほどの明るさだった。無数の火の玉が圓をなして湧き上り吹き上る壮観に息を呑みながら、丘の上からモスクウの火災を見おろすナポレオンを描いた絵を思い浮かべ、妻絶美とはまさにこれだなと感嘆していた。ところで、四月十八日の入学試験は、応募者一一七人、入学許可数一三〇、入学手続者六七名、地理歴史科の入学試験としては未曾有の高い競争率であった。「当時すでに昼間部の学生はどの大学でもすべて勤労奉仕で工場に動員され、授業は全く行われていない状態だったので、同じく勤労働員で地方から東京に連れて来られたこの年度の中高等学校卒業者が、少しでも授業が実際に行われている夜間大学に殺到したために起った現象」と宗京手記では解釈している。

二十年度の新学期は、しかし、新入生に対してはもち

空襲を受け、それは東京からも見えた。東京そのもののへの大空襲は以上で一段落の形だったが、決して跡を絶つたわけではなく、八月十日夜、現に筆者は煙塵をかぶりつつ空襲による火災の火炎を間近かに眺めて王子の近くを歩いていた。メモによると自分に割当てられた講義期間中、五月三十日、六月四・六・八・十一・十五・二十日と、合計七晩講義に出ただけである。その他は出なかったのか、出られなかったのか、理由は何か、一切わからない。おそらく、ある先生ある学生は家を焼かれあるいは一家離散し、交通機関も電燈も水道も潰滅寸前、いやすでに瓦解の状態だったから、先生生徒の双方にとつて、講義どころではなかつたのであろう。

昭和二十年九月に卒業したものは二十六名、ほかに二十名十二月に卒業している。この二人は、二十年に入ってからのものである。そのほとんどすべては十八年四月の入学者であり、その時入学を許可されたものは一〇三名、中途退学者七〇名と記録されている。七〇という数字は、内訳が明確ではないものの応召・動員による学生数の減耗の著しさを物語る一つの資料といえよう。なお史学科は前後六回、地理歴史科も二十年の卒業生をふくめれば同じく六回卒業生を送り出している。六回という回数は同じであるが、史学科の場合と地理歴史科の場合

ろん、三年生（二年生はいない）に対しても、もはや正規の授業を行なえる状態ではなかつた。辛うじて、九月卒業予定の三年生のために、次のようなはなはだ変則的な授業日程が組まれた。五月一日～十五日…三島一、同十八日～二十八日…後藤守一、同二十九日～六月二十三日…岡山俊雄、同二十五日～七月十日…多田文男、同十一日～七月末日…宗京熒三、という日程である。なお新入生に対しても、その期待にそむかぬため、七月十六日～同月末日…内藤智秀というスケジュールが後れて決定された。この日程は宗京手記に出ているが、それは研究室日記に基いて書かれたものと思われる。

さて右のような、まさに非常時の授業日程を示されると、あたかもそれだけの授業は実施されたかの印象を受ける。岡山自身、駿台史学七号の宗京手記で、忘れ果てていた右の授業日程に接した時には、夜学への往路に焼跡の焼残りの柱を路傍まで運んでおき、真暗くなった帰路にかつぎ帰って、炊事用の燃料とした記憶が一方でははっきりしているの、なるほどそういう集中講義的なやり方で講義をしたのだったかと、何となく実際に授業を行ったような気になった。しかし現実には、二十年五月二十三日と二十五日には大空襲があり、それで東京はあらかた焼野原となった。同月二十九日には横浜が大

	卒業年月	卒業者数
史 学 科	10年 3月	15
	11 3	16
	12 3	11
	13 3	16
	14 3	17
	15 3	10
	計	85
地 理 歴 史 科	16 3	11
	17 3	19
	17 9	36
	18 9	40
	19 9	59
	20 9, 12	28
	計	193

第3表 年次別卒業者数

とでは、学生数ないし卒業者数に及ぼす戦争の影響の有無という、大きな条件の違いがあるから、第三表の数字だけから学生数の増加などを云々するのは、厳密にはあまり意味がないであらう。

#### 戦後の地理歴史科

昭和二十年度の入学試験は、先にも述べたように、史学科の歴史はじまって以来最高の競争率で行われたが、その間にも東京は着々と焦土化して行った。それでも、十八年四月に入学したのは、上記の変則授業を受けて、おおむね九月に卒業した。十九年には学生を募集しなかつたから、二年生にあたる学生はいなかつた。四月に入学して、まだほとんど授業を受けていない一年生だけが二十年度の学生である。いや、実はほかに、臨時徴兵検査、特別志願、応召による入隊、入団者等で、終戦

科目	地理演習 地理実習 地理学実習 地理学 日本地理 産業・交通地理 人口集落 政治地理 土壌・生物地理 海洋・陸水 地質・鉱床 アメリカ地誌 南方地誌 アジア地誌 日本地誌 経済地誌 欧阿地誌 日本地誌 人文地理 地形学 気象学 地理思想史
配当学年	1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 3 3 3 3 3 3 3 3
担当者	中野 多田 岡山 入江 渡辺 小笠原 佐藤 渡辺 多田 服部 渡辺 小笠原 小笠原 佐藤 中野 入江 渡辺 岡山 服部 渡辺

第4表 昭和22年度の地理関係科目と担当者。各科目とも毎週2時間。大別すれば、自然地理8、人文地理10、日本地誌6、外国地誌8、地図関係4、他に地理思想発達史と地理演習のおの2時間、合計40時間である。20、21、22、23年度で担当者は相当変化している。

後ほつぼつ復学したものの若干名が、上級生としていたのである。

さて二十年度から新しいカリキュラムでやることになっていたことは既に述べた。そのカリキュラムは、確実なところが実は容易にわからない。第四表には一年生から三年生まで揃った二十年度の分を示したが、すべてが十分な資料に拠っているわけではない。推測による部分もあり、当時の学生の記憶にたよったところもある。今改めて眺めてみて、総科目数の多さにまず驚く(歴史の方はもっと多い)。ことに三年に配当された科目が異常に多い(歴史の方でも三年次の負担が最も多い)。この数の多さは履修の仕方によって調節できるようにになっていたのかもしれないが、今それを明らかにし難い。いずれにしても、教員免状を得るためには、最少限度これだけの必要という文部省の指定に従った結果、このような課程になったと考えられるが、数年後に発足する新制大学のカリキュラムについての考え方は、むしろ全く対蹠的であるのは興味がかかる。文部省の示した最少限度の要求をたしかめる必要があるが、そこまで手をまわす余裕がなかった。

終戦の前後には教師陣にも変動があった。小川徹は十八年度末限りで、吉村信吉・井上修次は終戦を境に地理

歴史科の教壇から身を引いたと考えられる。昭和二十年四月からは、授業のできる状態ではなかったから、実際には十九年度末までということになるかもしれない。そして昭和二十一年六月に服部信彦、同年九月に渡辺操、二十二年四月に中野尊正と入江敏夫、同年五月に小笠原義勝を迎えた。これで教師の約半数が交代し、期せずして教師陣のあるていどの若返りがおこなわれた。就任の時が五月、六月、九月と、学年の中途であることも、授業はまだ平常化せず、かなり融通性のある時間割と科目分担で行われていたらしいことを暗示している。

事実、昭和二十年秋の授業は、九月二十四日(という記録あり)にはじまり、十二月十一日で終わっている。筆者はどういうわけか十月十九日から講義をはじめている。出講日は金曜日で五時半から八時半まで、担当科目は地理思想発達史と気象気候学である。右の時間内にかかるべくおやり下さい、というようなことではなかったのかという気もする。むしろはつきり覚えているのは、雨に灰が洗い流されて、焼野原の色がようやく落ちて来たというようなことである。冬休みは十二月十二日から二十一年二月四日まで、それから三月二日まで授業、続いて試験。

二十一年度は五月二十日?から七月六日まで授業と、

まだやや変則的であり、終戦前の入学者で戦後復学した十三名は二十一年九月に卒業した。そして二十一年の夏休み後からは、授業の開始と終りの時期は久しぶりに平常に近くなった。しかし瓦礫の原だった焼跡は、涯しない身の丈ほどの雑草の森林に変わったというだけで、夜はまだまっ暗、国電飯田橋駅から二百メートルもはなれていないところで人殺しが行われるという、今日からはとうてい想像もできない都内の状態だった。

昭和二十二年一月二十一日、戦後中央気象台海洋課に移った吉村信吉——論文数百篇、その半数は欧文で書かれている——は、観測用器械をソリに積んで諏訪湖の氷上を渡っていた、その氷が割れて殉職という痛恨事が起った。同じ年の年度はじめに、前記の中野入江小笠原三氏が就任し、地理の教師陣は再びようやく整い、科目の担当も相当大幅に変化して第四表の形になった。昭和二十年春、混乱のさなかに入学した新制度による学生も、この年度末すなわち二十三年三月に卒業し、昭和十七年以来の九月卒業という戦争の名残もついに跡を絶った。地理専攻科卒業生十四名、歴史専攻科卒業生三十名であった。なお二十四年三月には地理専攻科から七名、歴史専攻科から三九名の卒業生が出た。

宗京手記はその終り近くに「文科長の尾佐竹猛先生が

glaciated areas. Bull. Geol. Soc. Am., 60, 1485—1516.

相馬秀広 (1974) 白馬岳北部におけるいわゆる“二重山稜”. 地理予, 6, 104—105.

Stingl, H. (1969) Ein Periglazialmorphologisches Nord-Süd-Profil durch die Ostalpen. Göttinger Geogr. Abh., 49, 115p.

田中邦雄・平林照雄・小谷団研 (1971) 糸魚川—静岡線北部地域の地質構造. 信大教養部紀要, 8, 48—51.

トリカル [照田訳] (1963) 周氷河地形. 創造社, 259p.

辻村太郎 (1926) 複断層崖の発達. 地質雑, 33, 75—90.

—— (1942) 断層地形論考. 古今書院.

—— (1959) 黄葉集. 古今書院.

Wahrhaftig, C. and Cox, A. (1959) Rock glaciers in the Alaskan Range. Bull. Geol. Soc. Am., 70, 383—436.

Way, D.S. (1973) Terrain analysis. Dowden, Hutchinson and Ross, Stroudsburg, 392p.

山崎直方 (1902) 氷河果して本邦に存在せざりしか. 地質雑, 9, 361—369, 390—398.

山崎敬・長井直隆 (1960—1961) 越中朝日岳の植生. 植物研究雑, 35, 341—351 ; 36, 213—222.

吉川虎雄・杉村新・貝塚爽平・太田陽子・阪口豊 (1973) 新編日本地形論. 東大出版会, 415p.

疎開先から帰られてからの動きは非常に積極的で、一時は専門部文科を旧制度の文学部に昇格させようとの計画も、戦後一年たたない時期に関係者の間に熱心に協議せられ、ある程度の具体化を見た程であった」と記している。この旧制度の文学部とは文芸科・史学科・哲学科・地理学科の四科をもつもので、はじめてそれが審議されたのは二十一年六月十二日の教授会である。地理からはこの時多田文男と岡山俊雄が出席した。この計画は四ヶ月後に主唱者が急逝されたことによって挫折したが、その遺志は、宗京手記もいうように、「昭和二十四年新学制が実施されるに当ってようやく結実し」た。新制大学の文学部の設置は、単に時運に際会して実現したものである。なお、二十四年三月の地理専攻科の卒業生は、新制大学の一部または二部の三年に編入され、新制大学第一回の卒業生となった。また二十四年四月に専門部の三年生となるべきものが、新制大学の二年に移った例もあり、専門部にそのまま在学して、二十五年又は二十六年に卒業した上、新制大学に編入されたものもある。専門部地理歴史科は二十六年三月に廃止されたが、昭和七年にはじまる文科の地理は、上述の経過を辿って、文学部の史学地理学科の地理学専攻へと移行したのである。

執筆者紹介 (目次順)

石井素介	明治大学文学部教授
下村彦一	明治大学文学部講師
小嶋尚	明治大学文学部助教授
杉原重夫	明治大学文学部講師
清水文健	科学技術庁防災センター
宇都宮陽二郎	国際航業株式会社
岩田修二	東京都立大学大学院博士課程在学中
岡沢修一	明治大学大学院博士課程在学中
松田孝	明治大学文学部教授
岡山俊雄	明治大学名誉教授